

中支分路口分遣隊

静岡県 小林 年 男

私は豊橋に入管後、わずか二週間で、豊橋駅を万歳に送られ、広島へ行き、宇品港を出航して、上海に一旦上陸、汽車で廬州へ到着した。雪の降る日であった。第二中隊だった私は、脇田（分路口で戦死）その他の戦友と共に、歩兵砲へ移り、初年兵教育を受けた。

その廬州は別名「合肥」と言い、淮南線沿線で、巢湖という湖の近くにある。古い城壁に囲まれた町で、東の駅の近くに飛行場があり、これを過ぎると大東門という城門に入る。街の城門は大東門、西門、北門、南門があり、これらの城門で東西南北の検問がなされていた。このほか、小東門、綏靖門、徳勝門があるが使用していない。綏靖門には他の四門と同じように我が軍の衛兵所があった。

我が第五十八大隊本部の兵舎は町の中央の寺院のよ

うな古い中国風の建物で、屋根の瓦には、犬その他の動物達の姿が立っている優雅な建物であった。

この廬州の西方に六安という町があり、ここに支那軍は司令部を置き、廬州と対峙していた。敵は古兵が作戦へ出動したのにつけこみ、廬州奪還を豪語して総反攻を掛けて来た。私達は教育中だったが、これと連日連夜対戦し、文字通り東奔西走した。演習を中断して急遽出撃したことも度々で、また衛兵勤務、城門勤務にもつき、鉄道巡察、橋の修理、さらに幾度かの戦闘参加などのために、初年兵教育終了の検閲も出来ない状況であった。

中でも苛烈な戦闘は西門外であった。敵は払暁攻撃をかけて来た。私達は城門を開き、突撃に次ぐ突撃であった。在留邦人は全員武装で市街警備をし、国防婦人会は炊事を担当し、弾丸の飛び来る前線へムスビをトラックでとどける等総力で敵を撃退した。「今次戦闘全体を廬州反撃作戦と名付ける」と廬州全体に平安な日々が訪れた頃に会報に記された。

のびのびになっていた、平射砲での検閲も終わり、

初年兵は教育班より各班に分散され、一人前の兵隊として、古兵と共に普通の勤務につき、外出も出来るようになった。私は三枝、稲葉の戦友と共に、指揮班に配属された。

昭和十七年のその日は、よく晴れた日曜日だった。

外出日で、隊内はなんとなく和やかな空気がみなぎっていた。一装用に着替え班内の掃除をしていた。何と云っても外出は自由な時間であることが有難い、規律一点張りで、圧迫感のみ強い兵営内の空気から解放されて、自由な民間人的空気に接することに郷愁を感じ、思いは早や廬州の町にはせていた。その時、「全員舎前へ集合」緊張した声が響き渡った。この「全員舎前へ集合」は出撃であることは廬州総反攻の時に、何回も経験したことであった。「外出者整列」でなく、全員集合とは、がっかりした私の身に、「分遣隊がやられたらしい」の声が聞こえ、急ぎ集合する。

「分路口敵襲、直ちに攻撃する。編成を達する。迫撃砲一門、携行弾薬六十発、携帶口量で一日分、分隊長、砲手、弾薬手、小銃編成、五分後舎前へ整列」

私達は迫撃砲と共に待っていたトラックに乗り、営門衛兵の整列敬礼を受け営門前の木に巣くうカチガラスを驚かして快スピードで出発した。自動車は北門を通り、第二中隊本部のある崗巢警備隊へ立ち寄り、情報聞き、そこで二中隊の兵を乗せて二十分程走って停車した。見ると、前方にトーチカ陣地があり、我々より前に攻撃していた前の車の兵が散開して、ぐるっと取り巻き対峙していた。「迫撃砲前へ」私達は左へ迂回して歩兵のあとに散開した。身の引き締まる思いで見つめていた。「敵は居ない、突入せよ」との叫びが聞こえ、トーチカ陣地に入って行つた、ここが分路口分遣隊であった。

分路口分遣隊は、三角陣地という。三つのトーチカを三角形に結び、回りに壕をめぐらし、一番敵に面した最大のトーチカの横の地下壕が班内となっており、そこから直接北トーチカへつながっていた。その地下壕の入口のすぐ右側に風呂場をかねた炊事場小屋がある。陣地の中央には歩兵砲（狙撃砲）及び弾薬庫となつてゐる低い小屋が土で塗りこめられていた。炊事

と小トーチカの間、幅四十センチほどの一本橋が渡してあり、外部との交通はこの一本橋で行っている。

ここに夜はバリケードを作り、外部と遮断している。

二つの小トーチカの間「チビ」と呼ぶ、シェパードと土佐犬をあわせたいような、頑健で利口そうな犬が繋がれていた。敵から包囲攻撃を受けても、二十日間は持ちこたえられる。とのことであった。

私達が中に入ると、小銃の兵隊が中に一杯入っていた。話によると、この分遣隊は、瀬戸口班長以下全員八人で、たまたま中隊本部へ連絡に行っていた四人の兵のほかみなやられ、沢田一等兵は炊事に倒れていた。地下壕の中の布団の上に脇田一等兵がうつ伏せに倒れており、瀬戸口班長は地下壕の出口階段の所で、右手に一握りの髪をつかんで倒れていた。だき起こすと、まだ体温があったが、みるみる冷たくなっていったそうである。それまで友軍の来るのを待って、死ぬにも死に切れなかっただろうと思う。陣地入口の橋の手に、狙撃砲が脚を橋の方に向けて置き去りにしてあり、その横に狙撃砲弾薬三箱が散乱していた。

兵器弾薬庫の扉は開けっぱなしになっていた。敵は狙撃砲と弾薬まで持ち去ろうとして運び出したが、橋が狭いため運び出すことが出来ず、分解して搬送するすべも知らず、時間をかけると日本軍の襲撃のおそれがあり、あきらめて逃走したものである。班内から続いている北トーチカの片隅に、擲弾筒が一つ残っていた。薄暗いトーチカ内の黒い煉瓦と同じ色と形をしており、あわてた敵が見落としたものであった。

その他軽機関銃および弾薬、小銃および弾薬（帯剣も共に）、擲弾筒の弾薬等すべて持ち去られた。

二宮上等兵の姿が見えない。この二宮上等兵はどうしてこのトーチカ陣地から脱出したか、一人で脱出してどう方向を間違えたか、駐屯地外の分遣隊へ報告し、事の様子がわかったそうである。その時の様子はいろいろの話を総合すると次のようなものであった。

分路口分遣隊には、ずっと前より、一人の男の苦力（労務者）を使用していた。その苦力を兵隊は「よしこ」と呼んでいた。その「よしこ」は、この分路口については、兵隊より古く、よく知っており、長い間

使っていたので、真面目で、信用厚く、兵隊は誰一人として疑う者はなかった。

その「よしこ」は数日前に来て「嫁が決まったので結婚式をあげたい。私の嫁は美人だから金を相当つんでやって決まった。日頃ご厄介になった先生にぜひ出席をお願いしたい。全員で来てほしい。」と言ってきた。陣地を空にする訳にゆかないので、半分の人を参列するつもりで、楽しみにしていた。そこへ中隊本部より「その日に崗集へ連絡に来るように」との命令がとどいた。八人中四人連絡に出さなければならなくなり、「よしこ」には訳を話して参列出来ないかと断った。その日、半数の人が、中隊へ連絡に行ったあと、苦力の「よしこ」が数人の男をつれて分遣隊を訪れて来た。その時歩哨にたっていたのが沢田一等兵であった。沢田は陣地内で一番高い北トーチカ上の哨所より、下りて来て応対にあたった。「よしこ」は一人一人「私の兄です。これが私の弟です。」と紹介した後、「今日は先生が来られなくて残念です。これは本人の私の気持ちです。あとで食べて下さい」と言って足をたばねた

鶏数羽と籠に入れた卵を差し出した。沢田は銃を立てかけ、これを受取り、炊事へおさめた。

その時、身内、親戚と称する男達が、隠し持っていた拳銃を、沢田の後部から乱射した。沢田はその場に倒された。

壕内では、その至近距離の銃声に驚いた瀬戸口班長が、階段を昇ろうとする所へ敵が入口から手榴弾数弾を投げ込み、入口の所で瀬戸口班長が、布団の上には脇田が倒された。敵はトーチカ内にあった軽機を始め武器弾薬を運び出した。その時、倒れていた瀬戸口班長、脇田と敵との間に相当な格闘があった。炊事場に倒れていた沢田の帯剣（弾入れ共）をはずして持ち去った。兵器庫を開け狙撃砲と弾薬を運び出したが、あきらめ逃走した。

以上のような状況で、敵の謀略にあい、もろくも全滅してしまつたのだった。

ここで最大のミステリーは、二宮上等兵がどうして戦列を離脱して第五十七大隊の方の分遣隊へ報告出来たか。本人は体中がやぶの中をしゃにむに走つたよう

に傷だらけだったそうである。食糧の調達に行っていたとも考えられるが、たった四人しか残っていない、三人おいてただ一人で調達に行くなど考えられず、最前線でそんなことをする訳はない。何と言っても、本人が分路口の全滅の状況をよく見ていた、としか思えず、トーチカ内にいたとすると、手榴弾の炸裂する中で、どうして生きられたか。本人は興奮状態だったそう、で、みんなでいろいろ想像したが、結局誰にも分かっていなかった。

敵がこの陣地を占領して抵抗したら、もっと凄惨な戦闘となっただろう。単に三人の戦死以上に、重要な意義を持つ事件であった。

それから私達は、屍衛兵（死体を処理し遺骨になるまで死体を守る衛兵）となり、暮れなずむ北門で穴を掘り、丸太を渡した上に木の枝と薪を並べ、その上に脇田の死体を横たえ、木の枝と薪を並べ、毛布を三枚かけ、死体と木には油をかけ、毛布には水をかけ火を付けた。古兵より「毛布がかわくと、死体が焼けないから、時々かけてやれ」とバケツの水を、そばに置いて

てくれた。夜のふけてゆく中で、死体を焼く鬼火が妖しく燃え、そのうちシトシトと降り出した雨の中で、柔道二段の猛者で無口だった脇田君の面影を偲びながら、着剣して屍衛兵に立っていた。

次の日大隊本部で、廬州反撃作戦中の英霊と共に盛大に慰霊祭が行われた。今日だけは一番偉い人となって僧衣をまとった坂井古兵の誦経の声も長く長く感じられ、ラッパ「国の鎮め」も遠く遠く流れ、こんなつまらないことで死にたくないと思う一方、戦争とは、何と油断も隙もなく、陰惨なものであるとつくづく思った。

指揮班に帰り、昼めしが終わった時「小林一等兵は、すぐしたくをして、分路口分遣隊へ行け、三隅中尉が馬で行くので、同行して行くように」命令では致し方ない。装具をまとめ「陸軍一等兵、小林年男は、本日より分路口分遣隊勤務を命ぜられました。ここについでしんで申告致します」。申告もそこそこに、三隅中尉に従って出発した。途中、敵と遭遇したらメイファーズだなあ、などと思いつながら、将兵二騎は早足となり、

かけ足となり、ひた走りに走り分路口分遣隊へ到着し、私だけ着任した。

今度の分遣隊長は岡本兵長で、私を入れて、六人で、二人減ったことになる。初年兵は歩兵砲の私と鳩班の鈴木君の二人だった。鳩は異状のあるなしにかかわらず、岡集へ飛ばさないと帰り道を忘れてしまうそうので、時々飛ばし、鳩を交換しているようでした。

岡本兵長は直ちに周辺のポーロンを呼び敵が侵入して来たら報告するように嚴重に言い渡した。またある日、苦力（三十五歳位）がピンナー（天秤棒）で食糧を持って来た時は「チビ」がいきなり足にかみついて襲いかかったこともあった。主人の日本兵を殺したにくむべき中国人とばかり、中国人を見ると吠え襲いかかるようになったと思うと、忠犬チビがたまらなく可愛かった。

私達は保革油をぬってやっただけだが、数日で苦力の足は直ったそうである。また謀略の立役者「よしこ」は戦功により将校になった、との情報も入った。また朝突然友軍がトラックで出撃して来たことがあっ

た。「異常なしか、今朝方から分路口方向で銃声しきり、演習のつもりで来て見た」と言って演習をやって帰って行った。中隊本部でも神経をとがらせているようだった。

数日たった、朝、西方前方の廟より敵が散開前進して来た。狙撃砲を二発撃ち、一発は廟へ命中し、そこから出て来た敵を倒した、敵は逃走し、気をよくしたこともあった。

ある雨の夜、私が立哨していると、陣地西方の部落が騒々しい。何か大声で十人位の人が言い争っている様子であった、すぐ班内へ知らせると、みんな出て来て警戒した。そのうち、断続的に銃声が聞こえ、一人の部落民が「先生、匪族が襲って来た。自警団で戦っている。早く出撃して追っ払って下さい」と言ってきた。岡本班長は「出撃しない」と断った。自警団は中央の望楼の上から射っているらしく時々ピカピカと光る。若い私達は眼の前で襲撃されているのを見ると、追っ払ってやりたい衝動にかられた。けれどこの雨である。守地を離れることは出来ないし、謀略にでも

あつたら、こればかりの人数では、すぐ全滅するのが落ちだ。我々はこの陣地によっているから強いので、

陣地からはなれ、バラバラになったらひとたまりもないと私も思った。牛を全部もって行かれたそうである。

またこんな事もあつた。「前方を部隊が移動している」と全員で警戒した。「友軍は作戦討伐するような連絡はない。支那軍の移動だ」「敵は大胆にも崗集と分路口の中間を横切り移動した」とか、月の明るい夜のことだった。やがて私は原隊復帰し廬州へ帰ることになった。

思えば緊張の連続であつた。あのことがあつた後である。廬州総反攻を経て、神経が大分マヒして来た私も、遠く青白い火がスーッと飛んで消えて行くのを見ると、人玉ではないかと思つたりした。遠方の銃声は日常茶飯事だつたし、兵は陣地から一步も出ないし、苦力も中へ入れなかつた。姑娘の笑顔も住民の声も謀略と思えば思える中で緊張の連続だつた。こういう所に長くいると、いつかは心の中に隙が出るのではないか。ホッとした気持ちであつた。

【解 説】

小林氏の所属した独立歩兵第五十八大隊は、昭和十四年一月十四日、編成された独立混成第十三旅団（倭兵団）隷下の部隊であり、編成時の大隊長は古西秀夫中佐、爾後、昭和十四年十一月、三浦増穂中佐、十五年一月、田川潤一郎中佐であつた。

同旅団は第五十六、五十七、五十八、五十九、六十大隊の独立歩兵五個大隊と旅団砲兵、工兵、通信で編成されていた。

同兵団は淮南地区において共産新四軍を相手に警備治安維持、討伐と辛勞している。昭和十六年三月一日より、同月十六日まで、第十三軍隷下部隊として、淮南作戦（安徽省中東部の新四軍掃討）に参加し敵蟠居地を剔抉する功績をあげている。

其の後、執筆者小林年男氏は、独歩第五十八大隊に内地愛知県豊橋より補充された。

独立歩兵第五十八大隊の前身は第九師団後備歩兵第四大隊であり、後、前記独混第十三旅団編成と共に隷下大隊となつた。

同旅団は昭和十八年五月一日、第六十五師団（専）

に改編され、師団長、太田米雄中將、昭和十九年八月坂口静夫中將、歩兵第七十一旅団長、同十八年六月、重松吉正少將。

独立歩兵第五十八大隊長は、昭和十七年一月、柄田節大佐（陸士二五期）。

大隊略歴

昭和十八年七月十日、軍令陸甲三六号在支部隊臨時編成（安徽省合肥縣廬州）。

八月一日、江蘇省銅山縣徐州到着同地付近警備。

昭和十九年十一月九日、大隊長柄田大佐（柄田支隊長）指揮のもとに常德作戰に参加。

昭和二十年一〜二月、徐州付近（一市六県―中国における県は日本では郡相当）を分屯警備し、其の間大小数次の討伐掃蕩戦に参加。

昭和二十年三月〜八月、光号作戰準備、主力拓汪（海州北方六十キロ）に転進、挺進大隊とし作戰準備中、終戦の大詔發布、作戰行動停止。

八月二十一日〜九月三十日、東隴海線、徐州―運河

間の鉄道警備。

昭和二十一年四月連雲港出帆、佐世保上陸、復員。

小林氏文中にある小戦闘は共産新四軍との戦闘である。分哨、分遣隊勤務は敵中孤立の中である。住民を信じて敵襲を受け、偽った要請で出撃し、陣地を乗っ取られる。共産軍の常套手段である。

中共党軍に対しては旧来の軍閥時代の中国と同様の対応戦術では成果を挙げることは出来ない」と指摘されていた。

中共と民衆の關係は従来の為政者との關係とは違う。中共党軍は民衆を知り、民心を獲得するため党、軍をあげて努力を集中することにおいて、日本軍はもとより重慶軍側と比べてもはるかにすぐれており、量は劣っても、うかがい知れぬ強靱さを備えている。

戦術戦術的について言えば、その巧妙さは、マルクス・レーニン主義を学んだからではなく、中国の風土と歴史に基盤を据える民族主義を巧みに利用することにより得られる。

中共軍は民衆を味方とした遊撃戦を主とし、近代裝

備を備えた米英ソ軍などと比べれば劣等装備であった。中共軍隊の精銳とは、正規軍と全く様相を異にする治安戦において、即ち遊撃戦、政治戦、思想戦等多様な戦いに對し勝利を得る実力を持つことである。

中共党軍の軍事行動は、変幻出でまわまりなく、高度の遊撃戦を展開するので、我軍もいたずらに典範令に拘泥してはならず、臨機応変、機知と実行力が不可欠である。治安戦は戦闘行動に随伴して治安工作を実施しなければならぬ。「中共軍は強さを避けて弱きを撃つ」である。

当時の関係者は「中共軍は根強き雑草を刈りとるがごとく、蠅を追ひ払うがごとく、のれんの腕押しのごとく、まことに始末に困ったもの」「中共党軍を鼠にたとえるならば、鼠退治には力強い猛犬よりも行動敏捷な猫が必要、それよりも、鼠は繁殖する前に手を打たねばならぬ」と述べている。

中支付近の共產軍は概ね新四軍であり、蘇（江蘇省）中軍区、塩阜軍区、淮南軍区、淮海軍区、淮北軍区、蘇南軍区、皖（安徽省）中軍区の各区に編成され

ている。

軍区—軍分区—団（連隊）—營（大隊）—連（中隊）—排（小隊）と縦型指揮系統が確立されている。

党組織では、中共全国大会—中共中央執行委員會—中支地区は、蘇中区、蘇南区、蘇皖辺区、豫（河南省）、皖蘇辺区、皖中区、豫鄂（河北省）皖辺区の各党委員會で組織されている。

行政機關組織では、中共中央執行委員會のもと、中央政治局があり、華中局を、前記党委員會同様、蘇中区、蘇南区、皖蘇邊区、豫皖蘇邊区、皖中区、豫鄂邊区の党委員會がおかれている。

荒漠千里

新潟県 金子 富 栄

戦争と消耗——。戦争は最大の消費者である。特に近代戦では消耗が膨大となり、補給の成否が勝敗に大きく影響したものである。